

芭蕉翁記念館を訪れて

ベアーテ・ヴォンデ（ベルリン・森鷗外記念館副館長）

これまで私にとって松尾芭蕉といえば、ベルリン・フンボルト大学外国語学部日本学科の学生時代、「古池や蛙飛び込む池の音」などの句を勉強したことでした。この句はドイツでも有名なのですが、ドイツ語に翻訳する場合、「水の音」をどのように訳すかが難しく、森鷗外の作品の場合と同じく、一番簡単な日本語こそ一番翻訳するのが難しいのです。

ベルリン・森鷗外記念館はフンボルト大学日本学科の付属施設で、鷗外のみならず広く日本文化を紹介する目的で設立されました。記念館では、フランクフルト・アム・マイン大学日本学科元教授のエツケハルド・マイ博士による「芭蕉とその弟子」講演会がこれまで四、五回開かれました。ベルリンでも多くの市民が俳句に興味を持っており、会場はいつも聴衆で一杯です。

日本学術振興会外国人研究者招聘事業の一環で三重大学に一カ月滞在している間、私は芭蕉ゆかりの伊賀を見学したいと思い、芭蕉翁記念館を訪問しました。とくに興味を

持っていたのは句碑で、ドイツには句碑を造る伝統や風習がないこともあって、それらがどのような目的で、いつごろから造られたのかを知りたいと思っていました。稲澤義夫先生の詳しい説明を聴き、俳句について目が覚めるような気持ちになりました。これまで私にとって俳句とは、単なる短い詩でしかありませんでしたが、芭蕉に関する碑が三二〇〇以上もあると知って、本当に驚きました。そして俳枕に対する日本人の感覚を教えてください、日本人とドイツ人との態度の違いがあることにも気付かされました。ドイツ人にとっては今、見ていること、そして学んで過去を知ることが重要なのですが、日本人にとっては過去の時代と感情的な繋がりを持ち、過去を感覚的に感じとることが大切なのです。ベルリンの鷗外記念館を訪れる日本人観光客も、ある意味でベルリンを俳枕としてとらえていたのだと、ようやく理解することができるようになりました。

また展示に関する馬岡裕子先生のお話をうかがって、ペンネーム（号）の付け方や遺言書のあり方など日本文学の伝統のなかで、芭蕉と鷗外とに共通点が多々あることに気づかされました。これまで鷗外のことしか視野にありませんでしたが、芭蕉を含めた日本文学の流れのなかで鷗外を

とらえることが必要であると考えようになりました。

さらに記念館を管理運営する同じ専門的学芸員として、何より私にとって感動的であったのは、稲澤先生や馬岡先生が芭蕉に関する詳しい知識と情熱をお持ちであったことです。過去に生きた文学者を今の若い世代に興味を持ってもらうためには、古いものを展示するだけはいけません。だからといって、テーマパークのような浅い手法で話題づくりをすることは相応しくなく、知識と情熱に支えられた橋渡しが大切であることが痛感されました。ある時代の矛盾、葛藤、どのような条件でどのような想像力が生まれたのかを説明するには、人間的な素晴らしさを持った学芸員の先生方の日々の努力が何より大切であると思います。私は芭蕉をもっと深く勉強したいと思うようになったとともに、学芸員の皆さまからも多くの刺激をいただきました。